

身体運動文化学会創立 25 周年記念国際大会

祭る身体 ―「身競る」を「魅せる」―

目 次

1. 会場案内	2
2. 会長挨拶 原 英喜（國學院大學）	5
3. スケジュール	6
4. 基調講演	
岸和田祭りにおける運動連携～曳き手一丸となって極める“やり回し”～	
河合 克昭先生（大阪府立久米田高等学校校長）	7
5. シンポジウム 祭りにみる身体の静と動	9
祭りのサブカルチャーとしての綱渡りについて…「操る」という身体動作	
李 承洙先生（韓国中央大学校教授）	
スペイン・カタルーニャ州の「人間の塔」…塔を「つくる」という身体動作	
岩瀬 裕子先生（東京都立大学博士研究員）	
山車祭りの変容と身体…「運ぶ」という身体動作	
大森 重宜先生（金沢星稷大学教授）	
6. 一般研究発表	14

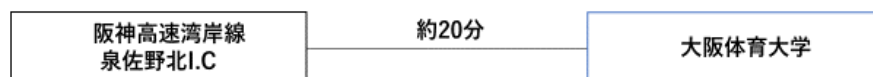
【会場案内】

会場：大阪体育大学

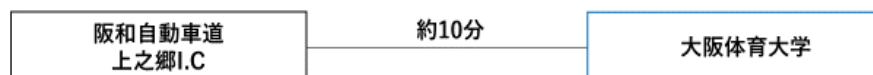
住所：〒590-0416 大阪府泉南郡熊取町朝代台 1-1

〈アクセス〉

自動車でお越しの場合



・交差点「住吉町」を左折 → 交差点「熊取」を右折 セブンイレブン近くの信号を左折すぐ

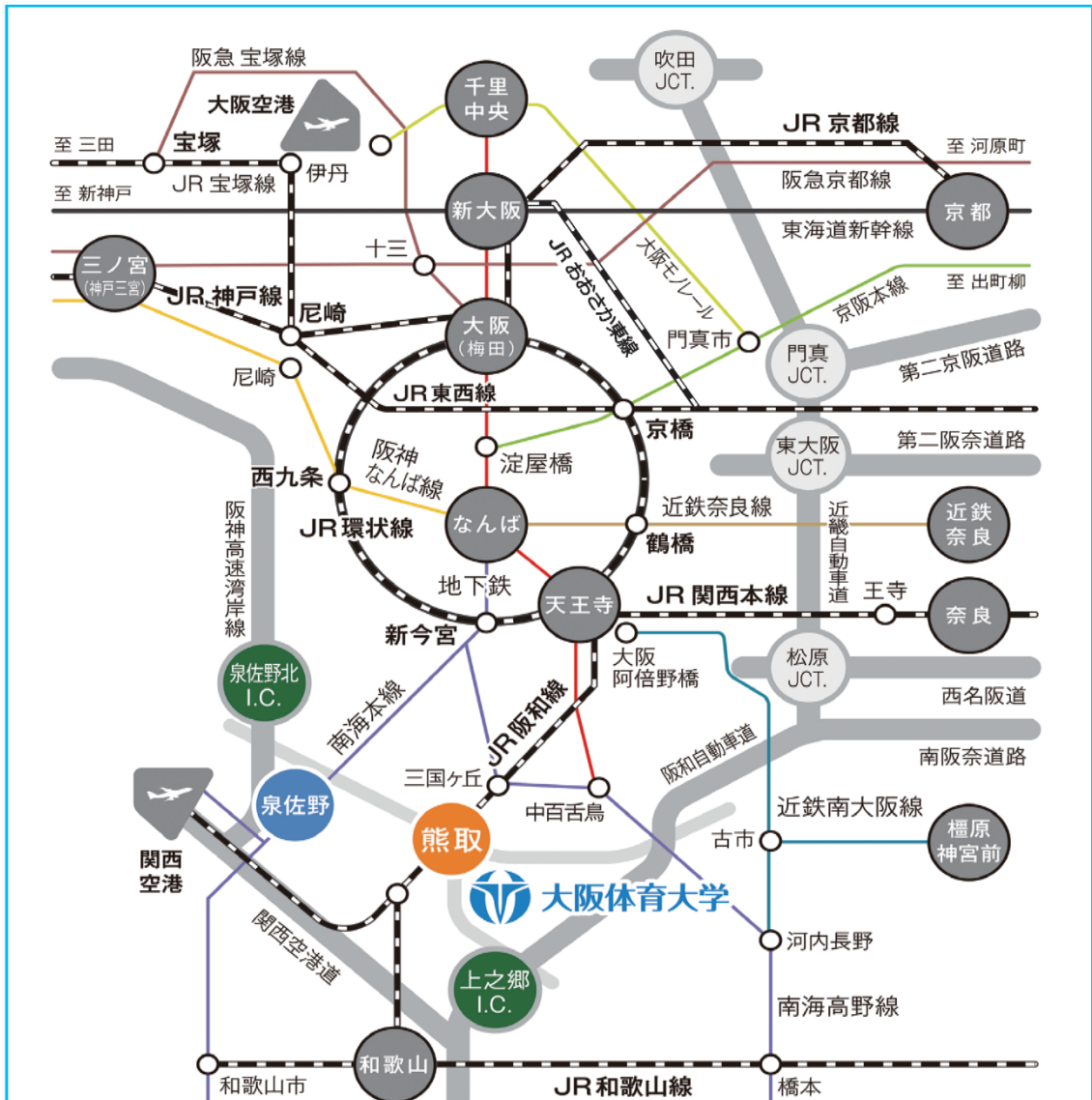


・交差点「上之郷インター前」を直進 → 交差点「新前川橋」を左折 → 交差点「土丸」を右折
→ セブンイレブン近くの信号を右折すぐ

※関西空港自動車道をご利用の方は、降りられませんのでご注意ください。

電車でお越しの場合

① 最寄り駅・熊取駅までのアクセス



J R 関西空港駅より：J R 阪和線にて約 15 分

J R天王寺駅より：J R阪和線快速にて約 15 分

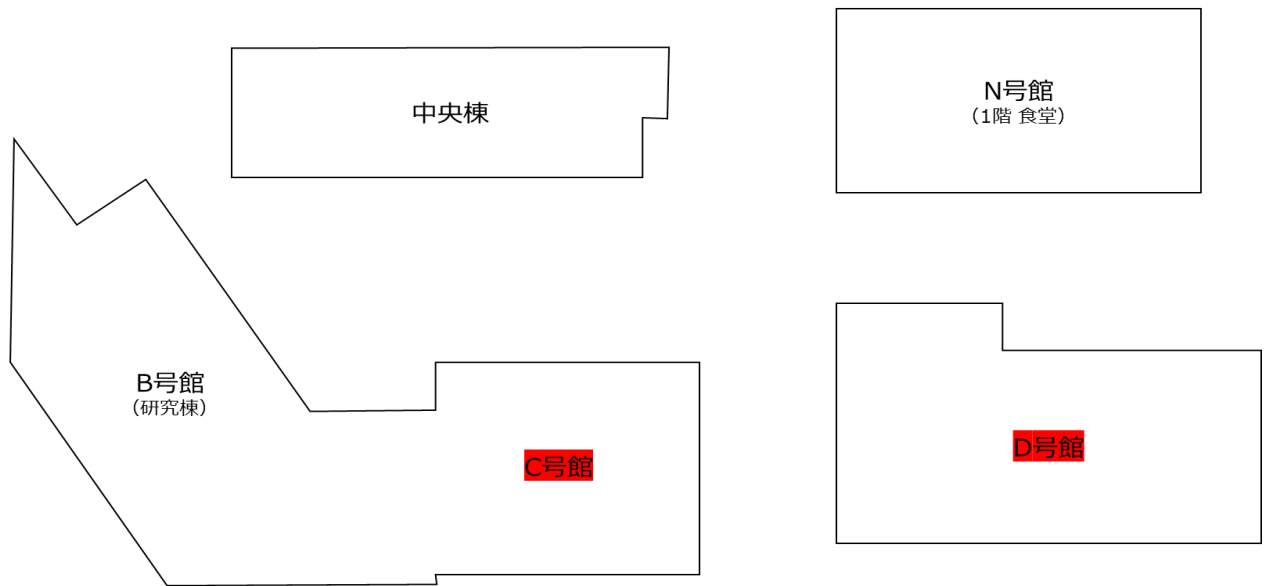
J R 三ノ宮駅より：J R 阪和線快速にて約 35 分で大阪駅→J R 環状線・阪和線（関空快速）約 50 分

J R 京都駅より：J R 京都線（新快速）28 分で大阪駅→J R 環状線・阪和線（関空快速）約 50 分

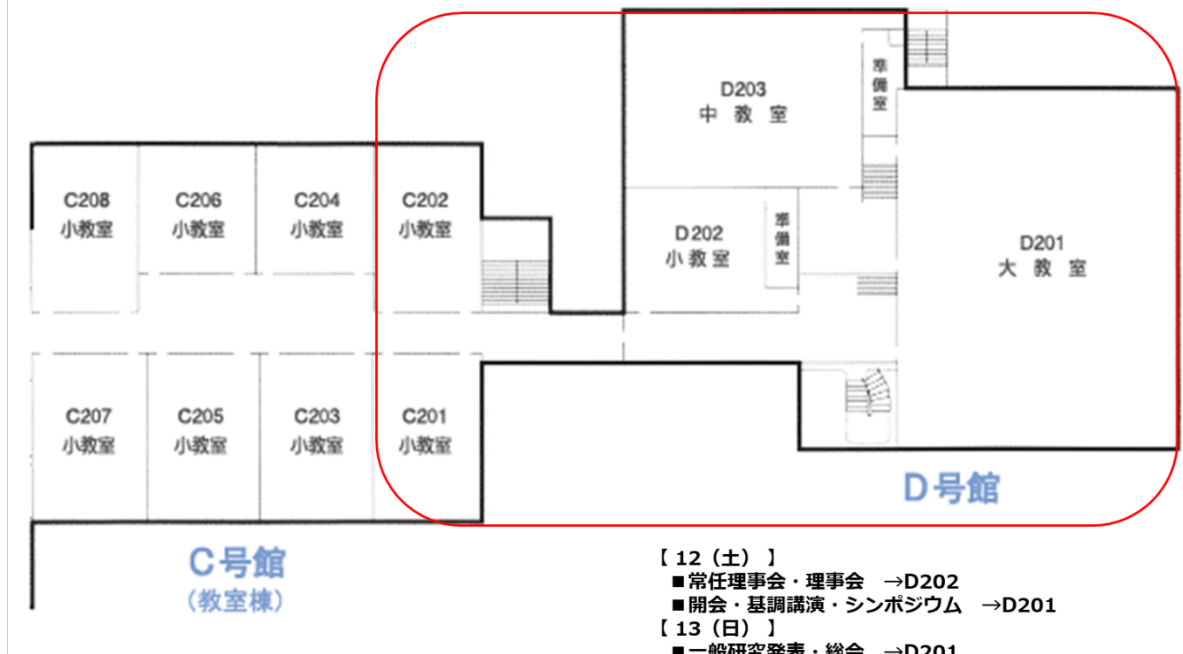
② 熊取駅より南海ウイングバスにて約 15 分

【大阪体育大学（C号館,D号館）案内図】

大阪体育大学熊取キャンパス（C号館、D号館）及びその周辺



大阪体育大学熊取キャンパス C号館、D号館 2F



ごあいさつ



会長 原 英喜（國學院大學）

本学会が1996年に第1回を開催して以来、今回は第25回目となる節目の国際大会を「祭る身体—『身競る』を『魅せる』—」というテーマで開催することとなりました。大阪体育大学体育学部の神崎浩先生に実行委員長の労を取っていただき、浪商学園創立100周年記念関連事業の一環として開催させていただくことは、大変誇らしく光榮に存じます。さらに、河合克昭先生には基調講演を、そして李承洙先生、岩瀬裕子先生、大森重宜先生にはシンポジストをお引き受けいただき心から感謝申し上げます。

本年は、新型コロナウイルス感染症の影響を受けて、東京オリンピック・パラリンピックの予定が延期され、多くの学会がこれまで通りの開催方法の変更を余儀なくされ、或いは、ウェブによる開催となっております。本学会も役員による協議を重ね、ぎりぎりまで開催方法を検討いたしました。このような状況の中であって、本学会に所属する会員の大学や研究機関などでは、遠隔で情報を交換できる手段を用い、研究を後退させないよう、足踏みしながらでも、或いは半歩でも将来につながる道を探るべきと考え、開催に漕ぎつけられたことを嬉しく受け止めております。

日々の生活が感染症の脅威にさらされている今、身体を動かして運動を行い、健康に気を付けながら文化的な活動を行うことは、人類にとって如何に大切であるかを、身をもって実感するところであり、学会として社会に貢献していかなければなりません。会員各位の努力の成果を示し、次への一步を踏み出すためにも本学会大会を充実させたものにしていきたいと思ひます。

本学会の主旨にご賛同いただき、賛助金などご協力いただいた会社、個人の皆様にこの場を借りてお礼を申し上げます。ありがとうございました。末筆ながら、この感染症に罹患された方々の1日も早い回復と、厳しい状況にある現状から英知を振り絞って乗り越えることを祈念したいと思います。

【スケジュール】

12月12日（土）

- 11：30～ 常任理事会・理事会
- 12：00～ 受付
- 13：00～ 開会・会長挨拶
原 英喜（身体運動文化学会会長）
- 13：05～14：05 基調講演 「岸和田祭りにおける運動連携
～曳き手一丸となって極める“やり回し”～」
河合克昭先生（大阪府立久米田高等学校校長）
- 14：15～17：15 シンポジウム 「祭りにみる身体の静と動」
シンポジスト
祭りのサブカルチャーとしての綱渡りについて…「操る」という身体動作
李 承洙先生（韓国中央大学校教授）
スペイン・カタルーニャ州の「人間の塔」…塔を「つくる」という身体動作
岩瀬裕子先生（東京都立大学 博士研究員）
山車祭りの変容と身体…「運ぶ」という身体動作
大森重宜先生（金沢星稜大学教授）

12月13日（日）

09：00～ 一般研究発表（発表 15 分質疑応答 5 分）

座長	発表者	タイトル
軽米 克尊 (天理大学)	筒井 雄大(国際武道大学)	大日本武徳会創設期における青少年を対象とした活動に関する一考察
	堀川 峻(筑波大学大学院)	近代における武士道思想に関する一考察 —明治 20 年代の内藤耻叟・松本愛重・重野安繹に着目して—
	稲川 郁子（日本体育大学）	金的はなぜ男性特有の急所なのか
斎藤 実 (専修大学)	南方 隆太(筑波大学大学院)	野球競技登録者人口の動態—地域的特徴に着目して—
	川井 良介（日本大学）	大学男子剣道選手の最大酸素摂取量に関する一考察
大石 純子 (筑波大学)	北川 修平(広島大学大学院)	エコロジカル・トレーニングに関する思想的研究 —集団球技スポーツの新たなトレーニングコンセプトの確立に向けて—
	吉本 陽亮 (神戸市立工業高等専門学校)	戦前・青年団剣道と大会について

11：30～ 総会（優秀論文賞ならびに若手研究者奨励賞表彰式）

【基調講演】



河合 克昭(かわい・かつあき) 先生

1961 年 大阪府岸和田市生まれ（59 歳）。

10 歳から地元道場で剣道を始める。

1980 年 大阪府和泉高等学校から剣道の指導者をめざし大阪体育大学へ進む。

1984 年 大学卒業と同時に大阪府立信太高等学校に保健体育科教諭として赴任。

その後、大阪府立和泉高等学校、大阪府立岬高等学校で保健体育と剣道部の指導を担当。

2005 年 大阪高体連剣道専門委員長

2008 年 大阪府立岬高等学校 教頭

2010 年 大阪府立和泉高等学校 教頭

2013 年 大阪府立和泉高等学校 校長

2016 年 岸和田祭礼別所町曳行責任者

2017 年 大阪高体連剣道専門部長

2018 年 大阪府立久米田高等学校 校長（現在に至る）

同年 岸和田祭礼年番

剣道教士七段

岸和田祭における運動連携
～曳き手一丸となって極める“やり回し”～

平成30年度岸和田祭礼年番
(大阪府立久米田高等学校長)

河 合 克 昭

京都祇園祭の山鉾が起源とされる「山車」(だし)による祭礼は、その後全国に「山」(やま)、「屋台」(やたい)、「山笠」(やまかさ)、「曳山」(ひきやま)、「地車」(だんじり)などに名称や形態を変えて広がっていった。もともと山車は天から神を迎え、それを地域で練り歩くことにより、疫病退散・家内安全・五穀豊穡などを願うために生まれたと言われており、山車には絢爛豪華な装飾が施され、壇上で音曲や浄瑠璃などを演じる地域も多い。

このような荘厳、華麗、雅といった我が国の山車の祭り文化の中で異彩を放つのが岸和田だんじり祭である。山車そのものの雅さではなく、山車の曳き方が祭りの見せ場となっているこの祭りで、重さ4トンの地車を如何に“やり回し”(道路の曲がり角における高速直角旋回)をスピーディーかつ正確にやり遂げるかが各町衆の修練・統率力・連携・気合いの見せ所となっている。

大阪府内には現在、約70箇所の地区で地車による祭礼が行われており、曳行されている地車にもいくつかの種類がある。岸和田市内においても九月祭礼と十月祭礼があり、岸和田市内だけでも現在81台の地車が曳行されている。本講演では、元禄16年(1703年)、岸和田藩主岡部長泰公が京都伏見稻荷を城内三の丸に勧請し、五穀豊穡を祈願した稻荷祭が起源とされる岸和田九月祭礼・旧市地区(22町参加)の祭礼を岸和田祭として解説する。

岸和田祭の起源当初は、各町から簡素な台車を繰り出し、「にわか」や狂言などの芸事を演じながら岸和田城内の三の丸神社や各地区の氏神神社に参拝する形態であった。やがて「上(かみ)だんじり」を「下(しも)だんじり」(俗に「岸和田型」と呼ばれる)という機動性を重視した地車に改造・発展し、町ごとの曳行スピードや威勢を競い合う形態へと変化していった。

そもそも構造上直進しかできない高さ4メートル、重さ4トンもある地車を“やり回し”するには、曳き手各担当の絶妙な運動連携が必須となる。地車の推進力となる青年団、旋回のタイミングの指示を出す大工方、旋回の動的きっかけを作る前梃子、地車本体を主体的に旋回させる後梃子の運動連携が上手くいって初めて豪快・華麗な“やり回し”が極まる。

しかし、約200～300人で曳き、ある程度の速度をもった重量のある地車の慣性エネルギーは凄まじく、曳き手の各担当相互の連携が上手くないと地車が旋回しきれず民家や電柱に激突したり転倒し、時に怪我人や死亡者まで発生することもある。正に一回一回の“やり回し”が命がけである。また、祭礼の2日間の走行距離は50kmを越え、曳き手が疲労困ぱいする中でも“やり回し”を続けていける体力と集中力、連帯力を養い、祭礼当日の給水や食事などの段取りを準備するため、1年前から新幹部の下、寄り合い(会議)や事前トレーニングが行われている。

今回の講演では、曳き手がそれぞれの持ち場でやるべき運動を理解・実行し、それを他者と連携してやり遂げ、町の誇りである地車を豪快・華麗に曳行し、その勇壮ぶりを競うという他の祭礼とは違う運動文化を紹介する。

シンポジウム

祭りにみる身体の静と動

本学会は「スポーツや武道、舞踊、芸能、祭りなどの身体運動を中核とする活動を、別々のものとしてではなく、また単なる身体運動としてではなく、一つの文化として、すなわち身体運動文化として捉え直し、新たな価値を見出しながら学問研究を進めていなければならないと考える」と設立趣旨に謳っているように、「祭り」も「身体運動文化」という研究対象の範疇に含めている。しかしながら、これまで学会大会のメインテーマとして掲げたことは未だない。本学会も本年で創立 25 周年を迎えた。また新たな四半世紀を進んでいくにあたり、「祭り」という文化を身体運動文化として捉え、研究を進めていくことは、今後の学会の方向性を考える上で新たな視点を提示するものと確信する。

祭りは世界各国で行われる人類共通の営みである。『広辞苑』によると、「祭り」とは「まつること。祭祀。祭礼」とある。また、「まつる」には「供物・奉楽などをして神霊を慰め、祈願する」「神としてあがめ、一定の場所に鎮め奉る。奉祀する」「祈祷する」などの意味がある。「祭り」とは神や祖先など、日常世界では交信しがたい畏敬の存在を感じる非日常空間でもあり、いわゆる神事として存在しているといえる。

一方で、祭りは、相撲や射的などの競争的な行事、田楽や神楽などの芸能的な行事も含んでおり、そこには人々に大きな楽しみを与えるという側面もある。

こういった祭りの意義は様々あろうが、人間の身体を駆使して行う点は共通項であるといえる。身体をいかに扱い、何を表現するのか、そしてそれは何のために行われるのか。ここに祭りを身体運動文化という研究対象としてみていく必要がある。

本シンポジウムでは、祭りにおける身体の在り方・関わり方について 3 名のシンポジストをお招きし、日本、隣国の韓国、欧州スペインのそれぞれにおける祭りについてお話し頂く。3 名のご講演を聞いた上で、身体運動文化として捉えた際の祭りについて議論を深めていきたい。

具体的には、①身体が何を表象するのか、②神事の媒介としての機能として身体はどのような役割を果たすのか（神に見せるのか、動作を奉納するのか、力を奉納するのか）、③身体運動として求められている所作は何かといった視点から議論をしていきたい。

シンポジスト

李 承洙（韓国中央大学校教授）

岩瀬 裕子（東京都立大学大学院博士研究員）

大森 重宜（金沢星稜大学教授）

指定討論者

田里 千代（天理大学体育学部教授）

コーディネーター

軽米 克尊（天理大学体育学部准教授）

①祭りのサブカルチャーとしての綱渡りについて…「操る」という身体動作

李 承洙（韓国中央大学校教授）

韓国の地域祭りが行なわれる場において旅芸人たちが演じる綱渡りはサブカルチャーとして付きものである。本発表では祭り全体の高を盛り上げるための見世物として演じられる綱渡りを事例に、その演目の中で見られる様々なパフォーマンスを分析する。その際、綱渡りは人間が綱を操る身体動作なのか、それとも神としての綱が人間を操り、観客に見せる行為なのかを静と動、両サイドからアプローチする。



李 承洙（リ・スンズ）

韓国中央大学校アジア文化学部教授、中央大学校附属韓国文化遺産研究所所長。

早稲田大学大学院人間科学研究科博士後期課程修了（人間科学博士）。

2016年3月～2018年2月：韓国スポーツ人類学会副会長、2020年3月1日～現在：韓国体育史学会副会長。

【著書】共著：「体育と伝統遊戯」『ソウル体育史』ソウル歴史編纂院、2019年；李承洙編『シルム』文化財庁、2017；「歳時風俗と祭り」『ソウル2千年史』ソウル市歴史編纂院、2016年；

【原著論文】「植民地期李鮮吉の柔道活動に関する研究」『韓国体育史学会誌』第24巻4号、韓国体育史学会、2019；「植民地期日本人警察幹部の武道活動に関する研究」『韓国体育史学会誌』第25巻3号、韓国体育史学会、2020他多数。

②スペイン・カタルーニャ州の「人間の塔」…塔を「つくる」という身体動作

岩瀬 裕子（東京都立大学博士研究員）

スペイン・カタルーニャ州の祭りには、220 年以上にわたって続く「人間の塔」がある。蟬集する人々が密着することで強固な土台をつくり、その中央で人が人の肩の上に上り下りすることで塔をつくる。塔は揺れすぎれば落ちる。ただ、揺れなくても、土台を形成するメンバーを圧迫し苦しめる。

そうした適度な流動性を要する「協働的身体」について考えたい。



岩瀬 裕子（いわせ・ゆうこ）

東京都立大学博士研究員、東洋大学非常勤講師。早稲田大学人間科学研究科修士課程ならびに首都大学東京人文科学研究科博士課程修了。博士（社会人類学）。

早稲田大学人間科学部スポーツ科学科卒業、株式会社宮城テレビ放送アナウンス部スポーツ担当を経て、スペイン留学。

仙台大学スポーツ情報マスメディア研究所研究員、国立民族学博物館館外研究員、日本財団パラリンピックサポートセンター・パラリンピック研究会研究員などを歴任。

スペイン・カタルーニャ州で伝承される「人間の塔」の最古参グループに交じって 2011 年より断続的な住み込み調査をしている。千葉県出身。

③ 「山車祭りの変容と身体」…「運ぶ」という身体動作

大森重宜（金沢星稜大学教授）

能登半島は祭りの宝庫と称される。UNESCO 無形文化遺産「青柏祭の曳山行事」、重要無形文化財「熊甲旗竿祭」、日本遺産「キリコ祭」ではそれぞれ神々を戴き、巨大な山車、旗竿などを曳き、昇き、担ぎ廻る伝統的身体運動文化であり、その構造と変遷を報告する。



大森重宜（おおもり・しげのり）

金沢星稜大学人間科学部教授、大地主神社宮司、七尾市教育委員会教育委員。

早稲田大学大学院博士課程修了。博士（スポーツ科学）。

主な研究は、スポーツ人類学からみた世界農業遺産能登を支える祭りの研究（平成 25 年度日本科学協会研究助成）、日本遺産キリコ祭りのスポーツ人類学的研究（平成 28 年度～30 年度 科学研究費研究助成）。主な著書に『よくわかるスポーツ人類学』ミネルヴァ書房、2017、『祭から読み解く世界』英明企画編集、2018。

スポーツの競技・指導歴としては、ロサンゼルスオリンピック 400mH 1600mR、日本代表選手、シドニー・アテネオリンピック陸上競技日本代表コーチ。

指定討論者



田里 千代 (たさと・ちよ)

天理大学体育学部教授。早稲田大学大学院博士課程修了、博士（人間科学）。

専門はスポーツ人類学・スポーツ文化論。主な著書・論文に『「ひと・もの・こと・ば」から読み解く スポーツ文化論』（共著）大修館書店、「○△□ー空間と伝統スポーツ：イタリアにおける『アスティの パリオ』の事例』『スポーツ人類学の世界』虹色社、『よくわかるスポーツ人類学』（分担執筆）ミネルヴァ書房。

コーディネーター



軽米 克尊 (かるこめ・よしたか)

天理大学体育学部准教授。埼玉大学教育学部卒業、筑波大学大学院人間総合科学研究科博士後期課程体育科学専攻修了。博士（体育科学）。専門は武道史・剣道史。

主な論文に「直心影流の法定の形に関する一考察」（共著）身体運動文化研究第18巻1号「直心影流の分派についての一考察-長沼派・藤川派・男谷派の試合・修練形態ならびに剣術観の分析を通して-」（共著）武道学研究第46巻1号など。

一般研究発表抄録集

スケジュール

期日：12月13日（日）09:00～

会場：大阪体育大学 D201 教室

座長：軽米 克尊（天理大学）

時間	発表者	タイトル
09:00～09:20	筒井 雄大 (国際武道大学)	大日本武徳会創設期における青少年を対象とした活動に関する一考察
09:20～09:40	堀川 峻 (筑波大学大学院)	近代における武士道思想に関する一考察 —明治20年代の内藤耻叟・松本愛重・重野安繹に着目して—
09:40～10:00	稲川 郁子 (日本体育大学)	金的是なぜ男性特有の急所なのか

座長：齋藤 実（専修大学）

10:00～10:20	南方 隆太 (筑波大学大学院)	野球競技登録者人口の動態—地域の特徴に着目して—
10:20～10:40	川井 良介 (日本大学)	大学男子剣道選手の最大酸素摂取量に関する一考察

座長：大石 純子（筑波大学）

10:40～11:00	北川 修平 (広島大学大学院)	エコロジカル・トレーニングに関する思想的研究 —集団球技スポーツの新たなトレーニングコンセプトの確立に向けて—
11:00～11:20	吉本 陽亮 (神戸市立工業高等専門学校)	戦前・青年団剣道と大会について

大日本武徳会創設期における青少年を対象とした活動に関する一考察

○筒井 雄大（国際武道大学）

酒井 利信（筑波大学）

大石 純子（筑波大学）

【はじめに】

明治 28 年（1895）の創設から解散までの約 51 年間にわたり、日本の武道を統括する団体として活動した「大日本武徳会」は、武道家表彰、統一形の制定、審判規程等日本の武道において重要な役割を果たした組織であるが、その活動の中で特に重要視されたものとして「武道教員の養成」が挙げられる。

設立当初から事業目的として掲げられていた「武術講習」が全国各地で普及し始めると、その講習を行う指導者の不足が、武徳会組織にとって急務の問題として顕在化した。この問題に対応するため明治 38 年（1905）に設立されたのが「武術教員養成所」である。「當所ハ日本武術の教員タルヘキ者ヲ養成スルヲ任務トス」として、剣術及び柔術教員の養成が行われた。その後、明治 44 年（1911）には私立学校令により、京都府知事の認可を得て「武徳学校」が設立され、明治 45 年（1912）には専門学校令により、文部大臣の認可を得て「武術専門学校（後の武道専門学校）」が設立された。同校では、中等学校における武道教員の養成が行われたことから、武道を専門的に学んだ武専出身者は、全国各地の学校において青少年の育成に携わったと言える。

以上のことから、「武道教員の養成」を通して、近代における青少年の育成に影響を与えたと言える武徳会であるが、「武術教員養成所」設立以前の武徳会創設期から、全国の学校生徒を対象とした事業（青年演武大会、短艇競漕会等）が行われており、この時から既に、武道による青少年の育成に目が向けられていたことが推察できる。

本研究ではこの辺りに焦点を当て、青少年を対象とした武徳会創設期の活動について考察し、その具体的な様相を明らかにすることを目的とする。

なお、武徳会が武芸十八般にも現在の日本武道協議会に加盟する武道種目にもない短艇の競漕会を開催していたことについては、当時の軍部との密接な関係を取り上げ、第 53 回日本武道学会で発表済みである。本研究では武徳会が青少年を対象として行った活動全般に焦点をあてるため、短艇競漕会についても研究対象として扱うこととする。

【先行研究と問題の所在】

本研究に関わる主な先行研究としては次のものが挙げられる。

- ・ 秦芳江「大日本武徳会及び武専の成立とその変遷について」武道学研究, 7(1), 10-11, 1974.
- ・ 中村民雄「大日本武徳会の史的研究」武道学研究, 16(1), 72-73, 1984.
- ・ 坂上康博「論説 大日本武徳会の成立過程と構造—1895～1904—」行政社会論集, 1(3)・(4), 59-112, 1989.
- ・ 太田順康「近代剣道の展開に関する一考察」武道学研究, 19(2) 29-30, 1986
- ・ 綿貫慶徳「明治 30 年代における新聞スポーツジャーナリズム—大阪毎日新聞の分析を通して—」日本マス・コミュニケーション学会, 2013 年度研究発表論文.

以上の先行研究において、まず注目すべきは、秦氏が指摘するように武徳会に関する史料が不足する中、中村氏、坂上氏、綿貫氏は、それを補う方法論として新聞記事を取り扱い、学会に対して一定の知見を提出しているという点である。太田氏は、試合に対する武徳会の姿勢が窺えるものとして青年演武大

会を取り上げ、その試合の様相について言及している。

いずれも優れた研究成果が挙げられているが、これまでの武徳会に関する先行研究において、武徳会創設期における青少年を対象とした活動に焦点をあてた研究は見られない。本研究によって未だ不明な点が多い、武徳会創設期の具体的な様相が明らかになる可能性は大いに考えられ、このあたりに問題の所在があるといえる。

【研究方法】

研究方法としては、先行研究に倣い新聞を読み解くことにより論を構築していく。取り扱う新聞としては綿貫氏が先行研究において述べているように、近代日本におけるスポーツジャーナリズムの礎を築いた『大阪毎日新聞』と、まだ先学において取り扱われていない『東京日日新聞』を対象とする。また本研究では創設期を対象とするため、分析・考察の対象とする時期は武徳会が設立された明治 28 年（1895）4 月 17 日から明治 37 年（1904）4 月 17 日までの 9 年間とする。明治 28 年（1895）4 月 17 日は武徳会が設立した日であり、また日清戦争終戦の日でもある。明治 37 年（1904）は日露戦争が始まった年であり丁度 9 年目の 4 月 17 日までを対象期間として設定した。

上記期間における武徳会関係記事から、青少年を対象とした活動に関する記事を抽出し、その具体的な様相を明らかにする。

【結果及び考察】

本研究における武徳会関係記事を網羅的に調査した結果、武徳会が青少年を対象として行った活動の様相として、これまで見られなかった具体的な様相が窺えた。以下、主だった事項を列記する。

- ・明治 32 年に開催された第 4 回武徳祭大演武会にみられる「少年」と記された撃剣試合の記事について。
（富山可誠、山村卯之助ら）
- ・明治 33 年に行われた第 5 回武徳会大演武会にみられる 15 歳以下の剣術試合の記事について。
- ・学生及び幼年者の会員に対する渡邊昇が述べた考えについて。
- ・高等学校、中等学校生徒及び 11 歳の児童等によって行われた遠泳会（遠泳会）の具体的な状況について。

武徳会青年演武大会や短艇競漕会以外の活動においても、青少年を対象とした活動の様相が数多く窺え、武道を通じて青少年の育成に力を入れていたことは、設立当初の武徳会の様相の一つとして挙げることができると考えられる。

上記で挙げた事項以外に窺えた様相については、発表において述べることとする。

近代における武士道思想に関する一考察

ー明治20年代の内藤耻叟・松本愛重・重野安繹に着目してー

○堀川峻(筑波大学大学院) 酒井利信(筑波大学) 大石純子(筑波大学)

【研究の背景及び目的】

これまで武士道思想に関する研究は数多く行われてきており、近代期を対象とする研究も鈴木康史(2001)や船津明生(2003)、Oleg Benesch(2014)等の優れた知見が既に提出されている。その中でも鈴木氏やOleg氏は、「武士道」が近代以降に「創出」・「Inventing(発明)」された伝統であることを指摘し、近世以前の武士社会で育まれた思想とは別物として近代武士道を論じている。しかし鈴木氏は他の論稿で『「創出」面に重点を置くあまり、連続性について注意を払わなかった」と言及し、その「創出」・「発明」には必ず「参照すべき過去」があるとも述べている(鈴木・2001)。このように近代の武士道思想に関わる研究は、これまで「創出」に至るまでの思想的変遷や近世武士道からのつながりが重要視されてこなかった。本研究は先行研究にみられるこのような課題から、まずは近代武士道が明治30年代前後に隆盛する以前の思想に着目することで、これまで語られていない近代武士道の新たな一面を明らかにすることを目的とする。

【問題の所在】

本研究は、日清・日露戦争の勝利や新渡戸稲造『BUSHIDO-The Soul of Japan-』発刊を機に起こったいわゆる「武士道ブーム(笠谷・2017)」以前、つまり明治27年に始まる日清戦争から「武士道」の語が「あらためて注目を集める(笠谷・2017)」前に著された武士道論に着目する。明治26年以前に「武士道」と題された著述・文献はごくわずかであるが、その時期に内藤耻叟・松本愛重・重野安繹という3名の歴史学者が武士道に関する論稿を著している。内藤は水戸学派出身で、明治以降は『「国学」を志向する高等教育機関(藤田・2007)』である東京大学文学部附属古典講習科の教員や史学協会の幹事として、当時多くの文献・雑誌に寄稿を行っている。松本は古典講習科を卒業し、その後日本唯一の官選百科事典『古事類苑』の編纂にも従事した人物である。重野は「明治初年の代表的な考証史学者(藤田・2007)」として知られ、帝国大学文科大学の国史科設立時から教授を務めており、さらに政府の歴史編纂機関であった太政官修史官などに属しつつ歴史論を展開した。このようにそれぞれ立場は違うものの、明治20年代に歴史に関する数々の著作を残した彼らが、「武士道」をいかに解釈し論じたのかについて紐解くことが、本研究の問題の所在である。

【先行研究】

本研究が注目する、近代武士道隆盛以前の武士道思想について言及がなされているものはごくわずかである。その中でも、この点について管見の限り最も多く考察が為されたものとして挙げられるのが、Oleg氏の「Inventing the Way of Samurai」(2014)である。そこでは「武士道ブーム」以前の思想的変遷を「First Explanation of Bushido in the Meiji Era」と題して全34頁に亘って考察を行っており、特に尾崎行雄や福沢諭吉、植村正久、鈴木力らの著述を取り上げているが、今回取り扱う武士道論には数行触れられている程度である。鈴木氏も重野や松本の武士道論について触れてはいるものの取り扱ったのは一部の記述のみであり(鈴木・2001)、網羅的に考察がなされているとはいえない。本研究は、これまで具体的に触れられてこなかったこれらの武士道論を、先行研究の指摘を踏まえつつ考察していく。

【研究資料】

内藤耻叟・松本愛重・重野安繹の3名が明治26年以前に著した武士道に関する論稿としては、以下のものが挙げられる。

- ・内藤耻叟 「日本文学」 9 寄書武士道
- ・松本愛重 「天則」 4(5) 武士道の話
「石見郷友会雑誌」 14 武士道之話
「史論」 4 武士道(承前) 等
「皇典講究所講演」 9(88) 武士道 9(90) 等
- ・重野安繹 「東京学士会院雑誌」 15(2)
武士道は物部大伴二氏に興り法律政治は藤原氏に成る
「史学普及雑誌」 8, 10, 11
武士道は大伴物部二氏に起り法律政治は藤原氏に成る

【結果及び考察】

〈武士道の淵源〉鈴木氏は、重野安繹が明治25年に行った講演「武士道は物部大伴二氏に興り法律政治は藤原氏に成る」を取り上げ、重野が「武士道の源」を「天皇中心の国家であった時代、物部、大伴にまで遡らせる」ことで、「日本国体（天皇）と武士道を結びつけるための論理操作」を行ったと言及しており、さらにそのような「考証（＝過去の参照と歴史の創造）」を「おそらく最も初期」にしたのが、この講演であるとしている（鈴木・2001）。しかし明治22年に「寄書武士道」を著した内藤耻叟も、天皇家を助けた「新田氏」や「楠氏」らが「武士の道、士の道」の元となる主義や行動を養成したと語り、また明治24年に「武士道の話」を寄稿した松本愛重も、「特に大伴佐伯及物部氏」が「皇室の守護」を以て武士道の元となる「尚武の氣風」を高めたとしている。これらから武士道と天皇を結び付ける論調は重野の講演以前から内藤や松本によって展開されていたことが窺えたが、そのような武士道論の考察に用いられる人物や時代にはそれぞれ違いがみられた。発表では、3者の見解について更に詳細な考察を行っていく。

〈武士道と倫理・道徳〉今回考察を行った3者の中で、明治20年代以降徐々に倫理・道徳教育との結びつきを強めていく歴史研究において中心的な人物であった内藤耻叟は、「倫理」や「倫理綱常」という言葉を用いて武士道を論じている。一方で、歴史研究のそのような潮流とは趣を異にする重野や松本は倫理や道徳の語を用いて武士道を語ることはなかった。「武士道ブーム」以降の武士道書では、井上哲次郎が「武士道は何處迄も道徳である」と述べたように、武士道＝倫理・道徳という形で語られるものも多くみられるようになるが、内藤はその先駆けとして、重野・松本は武士道＝倫理・道徳という解釈とは対照的な武士道論として、注目すべきものであった。詳細な考察は当日の発表に譲ることとする。

金的なぜ男性特有の急所なのか

○稲川郁子（日本体育大学）

1. 背景と目的

股間は打撲時の症状の強さから、武道においては金的、釣鐘などと称される急所として攻撃対象とされる。主に急所を打撃する当身技は、その危険性から現行の試合では禁止され、柔道では形（極の形、講道館護身術）にその技術を留めている。公益財団法人講道館発行による講道館護身術の教本では、同部について、「釣鐘といわれる男性の急所」と記され、急所が男女どちらかの性別に限定されているのは股間のみである。本研究では大学生を対象とした股間打撲の実態調査をもとに、改めて、なぜ金的が男性特有の急所であるのか理解することを目的とした。

2. 方法

2018～19年度、A大学B学部に入学生585名に質問紙を配布し、有効回答を得られた522名(男性263名、女性259名)を対象とした先行調査に基づき、文献的考察を行った。

3. 結果および考察

先行調査では、有効回答を得られた対象者のうち、股間打撲の経験があると回答した者は男性77.9%、女性25.5%、合計51.9%で、男性が有意に高率に受傷していた。NRSの平均値は 7.5 ± 2.0 （男性 8.1 ± 1.6 、女性 5.6 ± 1.9 ）で、疼痛は男性に有意に強かった。また、症状の消失に要する時間は、男性の最頻値は3～5分以内で30.7%であったが、女性では1分以内が45.5%で、男性は女性より回復に時間を要する傾向がみられた。症状は、苦痛を感じる疼痛は男性88.8%、女性93.9%で差はみられなかったが、男性では腹痛が66.3%にみられたのに対し女性は1.5%、気分不快が男性49.8%に対し女性0%、冷汗が男性43.9%に対し女性21.2%、吐き気が男性23.4%に対し女性0%、顔面蒼白が男性20.0%に対し女性1.5%、脱力感が男性18.5%に対し女性4.5%で各々に有意差を認め、男性では自律神経症状を伴いやすいことが示された。したがって、金的における「急所」の概念は男性のみに該当するものと思われた。

受傷後に実践した自己対処法は、男性では跳躍が最多で71.2%が実践していた(女性13.6%)。女性では何もしないと回答した者が45.5%で最多であった(男性7.8%)。一般に、股間の打撲後、男性が頻繁に実践している跳躍や腰部の叩打の医学的根拠は不明であるとされる。しかし男性は打撲により精巣の上昇感や消失感を感じている場合が多く、実際に一過性かつ軽度の精巣転位を生じている例も多いと考えられることから、物理的に精巣を下降させるための方途として跳躍が実践されている場合が多いと推測される。また、調査に先立って行った半構造化面接では、股間打撲後、自身で触診したところ実際に精巣が陰嚢内から消失し腹腔方向に転位し、その後復位した例が複数人から確認できた。これらの現象の原因については、打撲に伴う精巣挙筋および精巣挙筋が付着する内腹斜筋の強い収縮の影響が考えられるが、推測に留まる。武道で伝統的に行われている活法のうち「睾丸活」あるいは「陰嚢活」は、虚脱状態の受傷者を長座させ、腋窩に術者の両上肢を差し入れそのまま持ち上げ殿部から数回軽く落とし、さらに術者の母趾で腰を数回蹴るものである。これも、精巣を下降させるための方途として今日まで伝承されてきたものであると考えられるが、この方法の科学的根拠についての検証は困難である。

精巣には、T10-11に由来する交感性の血管運動神経と、仙髄に由来する副交感性の骨盤内臓神経が分

布し、交感神経に含まれる知覚線維が刺激されると精巣に特異な疼痛を生じることが知られている。陰嚢は L1-2 および S1-2 に支配されるが精巣は T10-11 に支配されるため、同部の病変は下腹部痛をきたすことが知られ、先述したように男性では 66.3%に金的の打撲に伴う腹痛がみられた。これに対し、女性では、恥丘部を前陰唇神経、会陰部は後大腿皮神経の会陰枝や陰部神経が支配するのみで、男性のように特異な疼痛を生じる解剖学的特徴はない。したがって打撲時の疼痛は衝撃に基づく単純な疼痛であると考えられる。

4. 結語

本研究の先行調査では、股間打撲の経験率は、男性 77.9%、女性 25.5%で、有意に男性に多かった。股間打撲の症状について、疼痛は男性に有意に強く、NRS は男性 8.1 ± 1.6 、女性 5.6 ± 1.9 であった。また男性は、腹痛、気分不快、冷汗、脱力感などの自律神経症状に加え精神的な症状を伴いやすく、精巣の上昇感や消失感を感じた者も多かった。症状の消失に要する時間は、男性は 3～5 分以内、女性では 1 分以内が最多であった。本調査により、金的は男性特有の急所であることが改めて明らかとなった。受傷後の対処法は、男性では跳躍、女性では何もしないと回答した者が最も多かった。本研究では、金的を強打した際の症状や実践されている対処法の実態について明らかにすることができたが、防止のための対策や対処法の医学的根拠については言及できておらず、今後の研究の進展が待たれる。

野球競技登録者人口の動態 —地域的特徴に着目して—

南方隆太(筑波大学)

1. 研究の目的

近年日本では、少子高齢化社会の進行や人口減少が社会問題化している。特に少子化は子どものスポーツ人口の減少が減少し、長期的なスポーツ人口の減少に発展する恐れがあり、競技の普及振興に大きな影響を及ぼすと考えられる。このような現状を食い止め、スポーツ人口を増加し競技の普及振興のためにはスポーツ人口の動態について地域や競技ごとに詳細な実態調査を行い、エビデンスに基づいた効果的なスポーツ人口政策を行う必要があると考える。そこで本研究では、競技人口の動態を明らかにするために、子どもの競技人口の減少が指摘されている野球競技を対象に、その人口の動態を明らかにすることを研究の目的とした。

2. 研究の対象と方法

野球はプレーする選手の年齢や使用する道具、野球のカテゴリーごとに選手を統括する団体が異なる。本研究では、小学生、中学生、高校生の軟式野球および硬式野球を統括する各団体の選手登録者数を青少年の野球競技登録者人口と定義し、同人口について、地理学的な視点から分析を行い、その動態の地域的特徴を明らかにした。

3. 先行研究の検討

野球競技人口に関する研究は、軟式野球普及の方策を考察した長久保ら(2012)の研究が挙げられる。しかし、長久保らの研究は単年の競技人口を分析して各都道府県支部の組織改革を提言したものであり、競技人口の変化やその要因を分析しておらず、競技人口の動態について十分に検討できていない。

他の競技人口について、地理学的に分析した研究には、社会基本調査のデータを基に、都道府県ごとにスキー人口の変化を分析した呉羽(2002)や講道館初段昇段者および初段以上の昇段者を対象に都道府県別に柔道人口を分析し柔道普及の地域格差を明らかにした松下ら(1976)や講道館女子部門入門者の「入門願書」を研究資料とし、女子部入門者について年次別、年齢階層別、職業階層別、地域別の観点から人口動態分析を行った田辺ら(1976)などが挙げられる。

4. 結果及び考察

(1)高校生野球登録者人口

各都道府県における高校生硬式野球登録者人口の変化と全国総数の変化を比較し分析した。ほとんどの都道府県で全国総数の変化と同様の変化をしているのに対して、北海道、岩手県、新潟県は全国総数の変化とは異なる、特徴的な変化をしていた。北海道では、1990年代の減少傾向が全国総数のそれに比べ短かったが、全国総数が増加傾向にあった期間は横ばい傾向であった。そして全国総数よりも早く競技登録者人口の減少が始まり、2009年から2019年までの10年間で20パーセント減少した。

岩手県の競技登録者人口は、1998年から2003年の期間に全国総数の変化とは反対の変化をしていた。また北海道の変化と同様に全国総数よりも早く2008年から減少傾向に転じた。岩手県の競技登録者人口減少は東日本大震災の影響が指摘されるが、震災による短期的な影響はなく、中期的な影響が表れていた。

新潟県は、全国総数と同様に競技登録者人口が 1998 年に増加したが、2001 年から横ばい傾向になった。それ以降増加傾向に転じることはなく、2010 年には減少傾向に転じた。

これら 3 府県の共通点には、全国的に競技登録人口が増加した 1998 年から 2010 年に横ばいの傾向があったこと、2016 年に始まった全国総数の減少傾向よりも早く減少傾向が始まったことの 2 点が挙げられる。

(2)中学生野球登録者人口

中学生軟式野球登録者人口は、2001・2004 年の期間に全国的に減少が見られた。その減少率をみると、北海道地方から中部地方にかけて大きく、中国地方、四国地方、九州地方は比較的小さかった。また、近畿地方のみこの期間において増加が見られた。近畿地方の変化をより詳しく見ると、大阪府と三重県において大幅な増加が見られた。2004・2007 の期間では、北海道と人口が集中する関東地方および近畿地方において増加が見られた。関東地方では、茨城県と栃木県の北関東 2 県で減少が見られたが、東京都、埼玉県、神奈川県、千葉県、群馬県において増加が見られた。近畿地方では、滋賀県及び兵庫県で減少が見られたが、奈良県、大阪府、京都府、和歌山県において増加が見られた。

一方で、2001 年から 2019 年の長期間でその減少率を確かめると、北海道地方、東北地方、関東地方、中部地方、四国地方、九州地方で 50 パーセント前後の減少が、四国地方で 45 パーセントの減少がそれぞれ見られ、19 年間で約半減していることがわかる。一方で、近畿地方ではその減少率が 39 パーセントと比較的小さかった。

(3)小学生野球登録者人口

小学生軟式野球登録者人口は、どの地方も 2007・2010 の期間は横ばい傾向にあったが、2010・2013 年の期間は東北地方と四国地方で 15 パーセントの減少が、関東地方では 13 パーセントの減少が見られた。特に東北地方は、2013・2016 の期間も 14 パーセントの大幅な減少が見られ、これらの減少の要因には東日本大震災による影響が考えられる。2016・2019 の期間では、全国的に地方部においてその減少率が比較的大きく、都市部では比較的小さかった。一方で、九州地方では他の地方とは異なり、全体的に減少率が小さかった。

小学生軟式登録者人口は減少率の差はあるがどの地方においても減少が見られ、その減少率は年々大きくなっており、登録者人口の減少に歯止めがかかっていない状態といえる。しかし、千葉県、大阪府及び奈良県は 20016・2019 の期間に増加が見られた。今後の野球競技登録者人口の増加のためには、全国的に小学生軟式野球登録者人口が減少している中で、なぜこの 3 府県で増加が見られたのかその要因を詳しく調査し明らかにする必要がある。

大学男子剣道選手の最大酸素摂取量に関する一考察

川井良介*, 大野達哉**, 佐々木陽一朗***

* 日本大学, ** サレジオ工業高等専門学校, *** 筑波大学大学院

1. 背景と目的

アスリートに対してトレーニングを処方する際、各スポーツ種目の運動強度を適切に捉え、個々の体力水準に応じた強度のトレーニングを提供することは極めて重要である。様々なスポーツ種目の運動強度やアスリートの至適トレーニング強度は、運動負荷試験などを実施して得られる生理学的指標を活用することで評価が可能となっている。その中でも最大運動能力の指標として用いられる最大酸素摂取量は、有酸素性機構による運動能力を反映すると考えられており、アスリートのみならず一般人のトレーニング強度を決定する際に幅広く利用されている（熊川ほか，2019）。

剣道は、日本古来の剣術を基盤とした伝統的な身体運動文化である。剣道の試合は、9～11m 四方の試合場において、1 試合 3～5 分程度の時間で行われる。試合者は、限られた時間の中で力の限り打突を繰り返り出し、有効打突の取得を目指す一方で、対戦相手の打突を竹刀や体でかわしたり、足を使って試合場を縦横無尽に移動して相手の打突を防ぐ。そのため、こうした動きの優劣は、試合の結果を左右する重要な要因であり、身体的・精神的要素などが総合したかたちで関与すると考えられている（林ほか，1993）。したがって、剣道選手は日頃の稽古やトレーニングに取り組む際、高度な技術の習得や自身の技術の洗練化を図りつつ、それらを支える体力的要素の向上が必要である。しかし、これまでに剣道選手の体力水準を評価する指標として、最大酸素摂取量に着目した研究は少なく（恵土ほか，1987；林ほか，1993；大藪ほか，1990）、剣道選手への適切な運動処方を考える際のデータがまだまだ乏しく、今後、更なるデータの蓄積が求められると考えられる。

そこで本研究は、男子大学剣道選手を対象に自転車エルゴメータの漸増負荷によるオールアウトテストを用いて、剣道選手の最大酸素摂取量などの生理学的指標を測定し、剣道選手の競技力向上を目的としたトレーニング処方やコンディショニングに関する知見を得ることを目的とした。

2. 研究対象および実験方法

研究対象は、A 大学体育会剣道部に所属する男子学生 10 名（高校もしくは大学在学時に全国大会への出場経験を有する者）であった。対象者は、病気や怪我などでペダリング動作に支障がある者、医師から激しい運動の制限を受けている者は対象から除外した。全対象者には事前に本研究の目的、方法、リスクなどを十分に説明し、文書にて同意を得た。

測定当日、対象者は「健康状態チェック表」を回答した後に、体成分分析装置を用いて、体重、除脂肪体重量などを測定し、15 分程度の準備運動とウォーミングアップを行った。そして、実験室内にて 20 分のインターバルを挟み、サドル上で椅坐位姿勢にて 3 分間の安静状態を保った後、実験を実施した。

実験方法として、本研究では自転車エルゴメータを使用した Step 課題（実験開始時の負荷は、80Watts に設定）を用いて、オールアウトテストを実施した。自転車エルゴメータのクランクの回転数は毎分 90 回転と規定し、4 分ごとに 30Watts ずつ負荷を漸増させた。サドルの高さは、ペダルが下にきたときに研究対象者の膝が少し曲がる程度に調節した。

実験中の測定項目は、酸素摂取量、心拍数、血中乳酸濃度とした。酸素摂取量は、自動呼気ガス分析装置エアロモニタを用い、EXP モードにて測定が終了するまで連続的に呼気ガスデータをサンプリングした。そして、オールアウトステージまでに得られた酸素摂取量のうち、最も高かった値を各対象者の最大酸素摂取量とし、これを研究対象者の体重で序した値（最大酸素摂取量／体重）を最大運動能力の指標として採用した。HR の計測には、胸部に装着したストラップに取り付けた Polar Pro センサーと心電計を用いて連続的に計測した。血中乳酸濃度の計測には、血中乳酸測定器を用いて、研究対象者の左手の任意の指の指先から測定した。心拍数及び血中乳酸濃度の測定タイミングは、実験開始直前、各運動ステージ終了直前（ステージ終了の 30 秒前）、オールアウト直後とした。また、血中乳酸濃度の測定は、対象者の測定値が 4mmol/L を越えた場合、もう一度測定し、それ以降はオールアウトするまで行わないこととした。主観的運動強度の確認は、対象者がオールアウトするまで各運動ステージ終了直前に行った。なお、オールアウトの判定は同一検者が行った。上記のプロトコルは、日本大学文理学部研究倫理委員会（承認番号：01-61）の承認を受けた。

3. 結果

本研究において測定されたデータの平均値と標準偏差として、1kg 当たりの最大酸素摂取量は、 $45.5 \pm 5.5 \text{ ml/kg/min}$ ，オールアウトタイムは 21 分 06 秒 $\pm$ 3 分 29 秒，安静時心拍数は、 $84.1 \pm 13.4 \text{ beats/min}$ ，運動中の平均心拍数は、 $153.1 \pm 12.5 \text{ beats/min}$ ，最大心拍数は、 $191.3 \pm 8.1 \text{ beats/min}$ であった。

【参考文献】

- 恵土孝吉・金子基之・小野寺孝一・政二里佳・池田幸應（1987）縦断的観察による大学生剣道選手の最大酸素摂取量．教科教育研究 金沢大学教育学部，23：107-114.
- 林邦夫・鷺見勝博・堀山健治（1993）全日本剣道選手権優勝者の体力特性—形態および最大酸素摂取量について—．武道学研究，26（2）：25-33.
- 熊川大介・上原広太・角田直也・平塚和也・横沢翔平・古田仁志・和田貴広・田中力・鈴木桂治・亀山歩（2019）夏季・冬季持久系種目の大学生アスリートにおける最大及び最大下運動能力．国士舘大学体育研究所報，37：83-89.
- 大藪由夫・金木悟・渡辺隆嗣（1990）剣道選手における最大酸素摂取量のペダリング速度からの検討．武道学研究，23（2）：151-152.

エコロジカル・トレーニングに関する思想的研究 —集団球技スポーツの新たなトレーニングコンセプトの確立に向けて—

北川修平¹，倉本晃司²，上泉康樹³

¹広島大学大学院総合科学研究科

²広島大学大学院教育学研究科

³広島大学人間社会科学研究科

・はじめに

今日のサッカーにおいて、新たな思想的基盤をもつトレーニング論として、欧州を中心に注目され始めているのが、エコロジカル・トレーニングである。これは、現在シェフィールド・ハラム大学に所属するキース・デイビッツ教授によって 2000 年頃提唱されたトレーニング理論である。本研究は、デイビッツのエコロジカル・ダイナミクス理論を基にした、集団球技スポーツへのトレーニングコンセプトの確立と野球への理論拡張を目的とする。その目的のために、本研究ではエコロジカル・トレーニングの理論的原則の解明とゴール型集団球技スポーツへの方法論を提示することを課題とする。

I. エコロジカル・トレーニングの理論的原則

デイビッツは、アスリートの熟練したパフォーマンスについて、エコロジカル・ダイナミクス（生態学的心理学とダイナミカルシステム理論を統合したもの）から、以下の 3 つの理論的アイデアを得ている。①アフォーダンスへの知覚的同調（特定の課題目標の達成を可能にする知覚的変数をパフォーマンス環境の特徴から拾い上げ、利用すること）、②神経生物学的システムの縮退の利用（同じ機能、もしくは同じパフォーマンス成果を達成するために、構造の異なるシステム構成要素の能力を利用して、機能的行為を組み立てること）、③準安定性のシステム状態において適応的運動変動性の探索（小さな変化に対して安定している状態であり、選手がパフォーマンス環境において不安定だからこそ、多様で創造的な行動パターン発生が可能となる）という 3 つのアイデアである。

II. エコロジカル・トレーニングの方法論

このトレーニングは、「制約主導型アプローチ（制約の操作がどのようにスポーツの実践的デザインを形成するのか）」と呼ばれ、コーチたちはアスリート—環境の相互作用を育成する学習環境の制約をどのように練習の中へ“デザイン”するかが求められる。この制約を考えるうえで重要なのが、トレーニングの特異性である。これは試合のパフォーマンス環境から抽出される、試合における行動を制御するためにアスリートによって用いられる情報の特異性である。コーチたちはこの特異性を練習にデザインするために、タスク制約（タスク目標、ルール、条件など、上記の②に関わる）・個人的制約（身体の大きさや行動の潜在能力といった身体的特徴や、情動、認知、モチベーションまでの個人的特徴も含む、上記の①に関わる）・環境的制約（タスクの環境的状态を反映して、個々人の外部にある物理的なもの、上記の③に関わる）の 3 つの制約から練習を考える必要がある。これらの制約を通して選手たちは異なる状況・環境において適切な解決策を選手—選手、選手—環境の相互作用から見つけるスキルを習得することができる。

III. ゴール型集団球技スポーツにおけるエコロジカル・トレーニング

例えば、サッカーにおいてペナルティエリアの外から何度も同じようにパスをつなぐ形で得点を奪うような反復練習（シャドートレーニング）は、既に状況の解決策が決まっており、試合環境の情報源を抽出できていない。サッカーの試合環境の特異性に基づいて、選手がどのような個人的特徴をもっているのか（個人的制約）、自チームのゴール前か相手チームのゴール前か・攻守の人数や初期配置をどの

ように設定するのか（環境的制約）、ボールをある一定時間ポゼッションするのか・より速くある位置へボールを運ぶのか（タスク制約）に配慮して、コーチたちは練習をデザインすることが求められる。

例えば、ドリブルでボールを前に運ぶことができるにも関わらず、パスを選択してしまふ選手に対して、決められたコース通りにドリブルをして得点するような反復練習ではなく、得点するためにボールをドリブルによって運ばざるを得ない制約をかける練習である。具体的には、ウッズ（2020）が挙げるように、4vs4で攻撃側のパスをインターセプトできた守備側のチームに得点を与えるような、パスのリスクや不確実性を増加させる練習である。コーチはドリブルの有効性を促進する方法でタスク制約を操作することができ、熟練したコーチは選手たちがある状況の望ましい解決策を自発的に導きだせる練習をデザインし、解決策の探索と状況への適応を促進する学習を生み出すことができる。

結論

選手をその環境と切り離してトレーニングするのではなく、スポーツ現象を選手—環境の規模で捉えることによって、選手はあるスポーツのニッチ（生態的地位）に住まう個体として成長することができる。その個体は、環境と切り離すことはできず、個体—環境が相互作用することにより、環境と一つの複雑な適応的システムを形成している。集団球技スポーツにおいては、ワンプレーワンプレーごとに、監督やコーチが選手たちに状況の解決策を出すような中央集権モデルでは間に合わず、選手たち自身でその場その時の問いに対する解決策を選手—選手、選手—環境の相互作用を通して探し出さねばならない。これを制約主導でトレーニングすることがエコロジカル・トレーニングの眼目である。

キーワード エコロジカル・トレーニング エコロジカル・ダイナミクス 制約主導型アプローチ 生態学的心理学 ゴール型集団球技スポーツ

・主要参考文献

- ・ Carl T. Woods, et al. (2019) Training Programme Designs in Professional Team Sport : An Ecological Dynamics Exemplar. Human Movement Science 66 : 318-326.
- ・ Carl T. Woods, et al. (2020) Theory to Practice : Preparation Models in Contemporary High-Level Sports Guided by an Ecological Dynamics Framework. Sports Medicine-Open 6 (36).
- ・ Keith Davids, et al. (2013) An Ecological Dynamics Approach to Skill Acquisition : Implications for Development of Talent in Sport. Talent Development & Excellence 5 (1) : 21-34.

戦前・青年団剣道と大会について

○吉本陽亮（神戸市立工業高等専門学校） ○太田順康（大阪教育大学）

【目的】

青年団（青年会・少年会を含む）とは、明治の中頃に、各地で自主的・自発的に誕生した社会的組織である。青年団はその後の明治 37～38（1904～1905）年の日露戦争以後、「地方改良」の役割を期待した国家によって計画性をもって統制され、「官製化」が進められていくようになる。この官製青年団では、各種の運動競技とともに剣道も盛んにおこなわれていた。大正 9（1920）年の時点で少なくとも撃剣・剣道は 3,525 の青年団で行われていたとされる。青年団で行われていた剣道は、大会が開催されることにより、町村の代表として地縁性をもって勝敗が争われたとされる。その後、青年団の競技熱の高まりによって、大正 13（1924）年から初の全国大会である明治神宮大会の青年団競技が開催されることとなる。こうした青年団の大会は、地域、年齢を代表とした青年が主役となることで独自の大会形式を作りあげたのではなかろうか。また、明治神宮大会のような全国的な総合体育大会の開催は、その後の剣道大会の競技方法にも大きな影響を及ぼしたであろう。本研究では、戦前の青年団の大会、特に剣道の大会に焦点を絞り、地方青年団の大会はどのような経緯、形式で行われてきたのかを明らかにし、審判員や武徳会との関係についてもみていく。また、明治神宮大会の剣道競技の大会形式や競技方法について考察し、地方予選の大会との比較検討を行う。

本研究は、筆者が平成 29・30 年度、全日本剣道連盟広報・資料小委員会報告書にて報告した内容をさらに追及し、考察を進めた研究である。

【研究方法】

各地の地方史、青年団誌に記載されている青年団大会の記録から、実施方法の傾向をつかむ。特に三重県の青年団大会についての記録が三重県史、村史に残されているので、そこから読み解いていく。詳細な資料としては、三重県亀山市で剣道師範を努めた加藤正齊が青年団大会の審判を行った際に報告した文書と三重県青年団大会の報告書からその実態を明らかにする。明治神宮大会の剣道競技については、内務省、厚生省報告の神宮大会報告書から、大会形式や出場選士について考察する。また大会を重ねるにつれてどのように競技方法が変遷したかについても分析していく。

【先行研究】

- ・太田順康・長瀬聡子「明治神宮体育大会に関する研究：明治神宮体育大会と昭和初期のスポーツについて」（『大阪教育大学紀要』IV,51,2,2003）
- ・太田順康「剣道団体試合の史的変遷について：明治神宮体育大会・青年演武大会を中心に」（日本武道学会第 39 回大会配布資料,2006.9）
- ・全日本剣道連盟「戦前・青年団における剣道の実施状況について」（2020.3）

【概要】

青年団における大会は、はじめ青年団の経営と自治、教育方針などについての討論大会として行われていた。明治末期ごろから、討論大会や総会の余興として剣道の試合が各地で行われるようになる。このころには、青年団の活動に政府が目をつけ、優良青年団として模範となる青年団を選出していくことになるが、そうした青年団の優良活動として剣道は健全な精神の修養、体力の増進などの目的をもって推

奨されることとなる。またこのころ、青年団の運動競技は主に春と秋に開催される運動会において盛んに行われている。運動会では村々を代表したもの同士が試合を行い、優勝旗を村に持ち帰ることを目指し勝敗が争われた。そのため、試合は勝敗を明確に決める勝ち残り形式が採用されていくこととなったと思われる。

三重県鈴鹿郡の青年団大会では、審判員の委託を元亀山藩士であり武徳会会員でもある加藤正齊に委託していた。審判を依頼する際の文書の送り主は郡の青年会長と教育長を兼任する人物であった。このことから、青年団が教育的背景を色濃く持ちつつ、外部委託の形式をとって大会運営を行っていたということがみてとれた。

明治神宮大会での青年団競技は、他の運動団体の組織系統から少し離れており、府県の代表選士は府県の連合青年団にまかせ、全国的事業は大日本連合青年団の手によって行われているというところに特徴があった。三重県の明治神宮大会県予選をみると、県の青年運動会の一部として予選会が行われていた。試合は勝ち残り戦で明治神宮大会と同じ形式をとっていた。出場選手の職業をみると、商業、漁業、仲仕業、庶民、小学校代用教員というように特段武道を専門とした職業ではなかった。明治神宮大会の青年団代表者は公正に選出されていたことを窺い知ることができる。

明治神宮大会の剣道の部は当初、中学校、宮内省、警視庁、武徳会各支部代表の参加を呼びかけたが、第1回大会は、結局、青年団 72 名、在郷軍人 224 名、専門学校生徒 42 名、全国道場及び武徳会支部派遣 94 名、陸海軍特別試合出場者 12 名の 5 部門に 444 名が参加、予選の状況、他競技との兼ね合いから、青年団、在郷軍人のみが優勝者を決めることになる。

第1回大会で青年団剣道試合の審判員だった高野佐三郎は試合について、「青年諸君が余程稽古を精励されたことを証明したものと思ふ」と評価をした。だが、「然し欲をいへは今少し真剣味があつて欲しかった。剣道は勝負のみが眼目ではないのである。」というように勝利主義に偏った試合であったというふうに総評しており、勝ち残り形式の功罪両面が窺える。明治神宮大会はその後、第13回大会まで行われることになるが、回を重ねるごとに競技形式も変化していくこととなる。第7回大会からは個人戦と団体戦が分離して行われるようになり、団体戦は2人戦で、2人が各々戦い1勝1敗の時は勝者同士で決定戦を行う方法がとられた。

青年団における剣道大会は、剣道界に組織の充実、規則の整備という面で大きな影響を与えたことが窺えた。特に部門別に試合を行うこと、団体戦の構成などの考え方は、今日の試合のあり方に大きな影響を与えていた。

12月下旬刊行予定
予約受付中

軽米克尊

天理大学専任講師
武道史、剣道史

直心影流の研究(仮)

予価7000円＋税

男谷下総守信友、島田虎之助、勝海舟らが修めた名門流派、直心影流。名のみ知られ謎に満ちた流派研究の成果を集大成する決定版。978-4-336-0709-1

21世紀の柔道論

【編著】藤堂良明

元全日本柔道連盟
教育普及委員会委員

村田直樹

日本武道学会副会長

A5判・252頁
2000円＋税

世界二百以上の国と地域で盛んに行われている柔道に関する歴史と未来を考察。「文化史」「形の意義」「武術としての柔道」「競技としての柔道」「世界の柔道の動向」など、21世紀に柔道を志す人間すべてにおくる新しい柔道論。978-4-336-0647-2



近代日本の武道論



中嶋哲也

茨城大学
教育学部准教授

A5判・624頁
8000円＋税

「術」から「道」という考えが誕生した明治期、「スポーツ化」という言説が登場した大正期、さらには古武道の「発見」まで。膨大な資料を検証し、変容する「武道」と「スポーツ」の関係を明らかにする。武道論を一新する大著。978-4-336-0645-4

国書刊行会

〒174-0056 東京都板橋区志村 1-13-15 TEL.03-6970-7421 FAX.03-6970-7427 HP▶<https://www.kokusho.co.jp>

*書店、または弊社までご注文ください。弊社へ直接ご注文の場合は4000円以上(税別)のご注文で送料無料となります。公費対応可。

KAZUTAKA



日本製

武道工房 一貴



奈良市の小さな工房で甲手を製造販売しています。「安全で使いやすく、無駄なく、シンプルに」軽さ、耐衝撃、操作性、フィット感、全てがこの甲手に。



武道工房一貴では、小手をはじめ剣道具全てをお取り扱いしております。

また、愛着ある剣道具を長く、大切にお使い頂けるよう、どのメーカーの剣道具でも修理を受け付けております。自社で修理しますので余計なコストはかかりません。剣道着、袴に関しては、日本で唯一、糸から天然藍で染めて制作される武洲一ブランドをお取り扱いしております。ぜひ本物の藍色をお試しください。

桐原弘貴

日本製甲子製造販売・剣道具修理、販売

〒630-8301 奈良市高畑町614-1

携帯 090-9984-5362

FAX 0742-24-0115

<http://www.kazutakanara.com>

天
Ten
選ばれ続けてきた必然

峰
日本製
最高級ミシン刺剣道具

お得な情報盛りだくさん！
ミツボシ
アプリ限定情報
ゲット！

ダウンロードはこちらから

GET IT ON
Google Play

Download on the
App Store

QRコード

武道用品の総合メーカー
株式会社ミツボシ

事業本部：TEL 077-535-9136 www.mitsuboshi-web.jp
〒520-0357 滋賀県大津市山百合の丘 10-26

(株)東京正武堂

株式会社 東京正武堂 特約代理店

北斗松翠型垂名札 有名選手多数御愛用
剣道具のクリーニングも承ります



北斗武道具

TEL・FAX.0745-75-6128

〒636-0123 奈良県生駒郡斑鳩町興留2-5-1

<http://www.hokuto-budogu.jp/>



剣道・柔道・武道用品全般

加藤武道具店

〒543-0024

大阪市天王寺区舟橋町19-15

TEL 06-6773-9015

FAX 06-6773-9016